近江の懐（ふところ）をめぐる 2

石川 亮

近江の懐（ふところ）をめぐる２

石川　亮

「近江の懐」とは「命の水の周辺にある暮らしの中から活きづく生業（なりわい）」そしてその「クオリティの高い手技や精神」に焦点を当てることからスタートしている。主に近江（滋賀県）の主要な街道沿いにある宿場町や城下町などを訪れ、その場で起こる独特の魅力を見つけ出すこと、そこから新たな広がりや気付きが生まれることを期待しながら取り組んでいる。

２０１８年春より成安造形大学に地域実践領域クリエイティブ・スタディーズコースがスタートした。特定の地域に関係しながら日々変化し続ける今日社会と向き合い、新たな生き方を模索し、見つけ出していく学びの場といえるであろう。彼らは美術系大学の学生が持つ素養としての造形能力を必ずしも兼ね備えているわけではないが、今日社会に対する現実感、違和感、生きづらさなどの感覚に敏感に反応する学生が多いように感じている。地域に出向き実際に見聞きするなど、体感することから始める地域実践基礎演習を担当する私は、「近江の懐探し」を授業内に取り入れ、地域の魅力や新たな気づきを発見する試みを始めている。その方法は、先ずはその地域で観光地など有名な場所を知ることから始まりその位置を地図で確認する。次に説話や歴史を予め簡単に調べつつ現場を探索するのである。

Name :
ISHIKAWA　Ryo

Title :
Omi's “futokoro” : Part Two

Summary :
Using a survey of an area in Shiga called Shukubamachi I will examine topics such as “techniques” and their “spirit” in order answer the questions, “Why have these particular techniques been preserved and passed down?” and “What special value were they perceived to encompass?” I will also look at why these examples are so limited.

探索のアプローチは有名スポットを足がかりとして、より深く踏み込むこと、地名から受けるイメージからの調査、知らないことへの好奇心からの展開、誰にも気付かれないような魅力発見など様々である。今回取り上げている「水口」「草津」は学生と共に街歩きをした場所である。自身が設定している「懐」の概念の拡張、近江学の新たな展開、そしてこのことを通じて自己の造形表現、研究活動への気付き、その可能性に迫っていきたいと目論んでいる。

一、長浜の看板

近年、景観広告に関係する様々な取組みに携わっている。景観広告とは簡単に言ってしまうと屋外広告つまり看板である。景観と頭につくことで難しいものであるかのように感じてしまうのは私だけではないであろう。では景観とは何か、これもさらに考えだすと難しい。風景、眺め、景色といったところであろうか、元はドイツ語のランドシャフト（Landschaft）を訳語として当てた様である。学術用語としては地理学の分野において自然景観と文化景観といった様に分類されている。日本では1990年代高度経済成長が落ち着きこれまで都市計画においてその用途に重点がおかれ「建築自由の国」と揶揄されたが、2003年に「美しい国づくり政策大綱」が策定され景観法が2004年に交付された。それ以後、景観という概念に対する意識が高まってきている。2006年から重要文化的景観の選定が文化庁により始まっている。その第一号そは滋賀県近江八幡市「近江八幡の水郷」が選定を受けた。2018年10月現在で全国に63件あるそうだ。つまり「景色、景観における重要文化財」と言えるであろう。

私は考えるが景観広告とは「景色、景観を形成する一つの重要な要素として、また景観に何らかの影響を及ぼす。」ということである。状況によっては店先の看板はその町の暮らしや歴史文化を伝える重要な要素となる。また看板を新しい価値として位置付けることによって、景色を一変させてしまう大企業の広告設置を踏み止まらせ、町並みを保持、改善し、住民みんなで意識を高める試みになると考えている。そこで気になっていた地域、長浜市の中心地を取り上げたい。以前「近江の水をめぐる」で訪れた商店街アーケード大手門通り、かどや前にて「長浜の名水」を汲んでいる時のこと、ちょうどその対面の建物に大きく「土田金物店」と立派な看板が掲げられていた。当時はそれほどの関心はなかったものの、その看板の凄味は記憶に残った。ほかにも一枚板の気合いの入った看板がたくさんあった。私の記憶の中でこれほど看板が豪華な街は滋賀県内の町並みで目にした記憶がない。今回改めてしっかり抑えておかなければと思い長浜の看板に迫ってみることにした。

「土田金物店」ひさし看板

まずはこの「土田金物店」である。長濱八幡宮から湖岸に立つ長浜城へとつながる大手門通り、そのまさに中心に位置する横綱クラスの看板である。大きな店構えのひさし屋根の上、横４５０センチ、縦90センチほどである。私が見たところ看板の文字は木製で一つひとつが筆書体に綺麗にカットされ金色の箔が押されている様である。おそらく素地に黒漆が何層かに塗られその上に金箔を押して仕上げたのであろう。それが等間隔に金網の素地に止められている。看板の周囲の縁の部分は木材の上に銅板が丁寧に巻いてある。赤茶けた色に経年の腐食が進み緑青が満遍なく全体にふき、美しい。中の様子をみながら扉を開けこの看板について聞いてみた。すると今は金物屋ではなくＮＰＯ法人「まちづくり役場」となっていた。平成８年、町をあげての博覧会を催した時に自治体と市民が一緒になって、ここを事務所として活用したのが始まりだそうだ。それから情報やまちづくりの拠点として今日に至っているとスタッフの原田桂さんがお話してくれた。現在も金物屋さんの本宅でありその金物屋さんは別の場所で商売はされているとのこと、「なぜ店先の看板が立派なのか?」と聞いてみると「この辺りはみんな豊かだったのだと思います。」と即答された。文字通り豊臣秀吉が交通の要衝としてつくりあげた町であり、今日も豊公さんとして崇められその豊かさが持続しているのだ。その証拠に土間から一段上がったところの襖を開けていただいた。その先には居間を通して向こう側に立派な庭園が広がっていた。このような庭園のある住居は「土田金物店」に限ったことではないと付け加えられたのが印象深かった。金物店の看板を外すことなく今日の町の拠点として活躍していた。

「元祖堅ボーロ本舗」ひさし看板

次にあげるのは駅前通り浜町の交差点から少し南へ下がったところにある「元祖堅ボーロ本舗」のひさし看板である。これも土田金物店と同じつくりである。外にあるため長年の風雨にさらされてか劣化は進んでいるが、ほぼ二階全体が看板に覆われており威厳を感じる。店の中に入ると堅ボーロを中心とする最中やせんべいなどが並んでいる。店主の奥様である清水礼子さんにお話を伺った。明治27年創業で今日まで変わらぬ味であり、今もこの裏で作っているとのこと、日清、日露戦争の時代は戦地へ兵隊さんに送られていた。砂糖が貴重であった時代からこのお菓子は持続しており、ひとつ口にすると生姜味の懐かしい感じが広がった。店内には当時使用していたオーブンが陳列棚に展示されていたり、大連市の地図が額装されていたり、その時代の空気が伝わってくる。この地が日本海の入り口敦賀湾から大阪、東京方面への経由地になっていたことを改めて連想させる。看板のことを聞くと「これは二代目です！」と答えられた第二次大戦中に供出で一旦、なくなり戦後復活したそうだ。他に宮内庁御用達、旧陸軍御用達の印や大陸との首都圏を

結ぶ拠点に位置している意識が店内の雰囲気から伝わり長浜という地の重要さを伝えている。堅ボーロを口の中で転がしながら店を後にした。

「お菓子処丸壱屋」突出（つきだ）し看板

堅ボーロ本舗を出て南へ一本目の道を曲がってすぐにもう一軒のお菓子処がある。道を挟んで北側にお店、南側に倉庫あるいは製作所であろうか、お店には突出し看板、倉庫にはひょうたん型の看板が吊り下がっている。双方を出入りされながら忙しく仕事されている人に声をかけてみた。快く答えてくださった方は店の主人をされている中川安治さんである。突出し看板は縦１００センチ横30センチ厚み10センチはあろうか。お店の両サイドに1枚ずつ計2枚吊り下がっている。中にひょうたん形で枠が彫刻され、その中に丸壱屋と彫られ金色に塗られている。更にひょうたん型の看板はひさしの上部2階から突出して掲げられている。そしてひさしの中央部には安治さんの実の妹さんがデザインされた和モダンをイメージさせる看板が取り付けられていた。突出し看板は今から20年ほど前に設えたとのこと。木の種類はわからないが堅いしっかりとした木板を2枚にスライスして両サイドに取り付けたそうだ。また残った部材でひょうたん型の看板も同時に制作したと話された。聞いていると材料屋さんに直接出向き木材を吟味し制作していることがわかる。本当に店の看板に対する意識や思いが高く、それがごく自然に普通に備わった感覚であることが伝わる。そして看板に対する意識についての質問をしてみた。すると、今から20年ほど前にまちづくり事業として食べ物屋さんが寄り合い、「うまいもん処梲（ウダツ）会」を立ち上げた。そしてそれぞれお店が独自性のある看板をきちんと作ることを進めたそうである。またその会は今も毎年「うまいもん処マップ」を作成して観光振興に役立てているとのことである。

最後に印象的であった言葉に「やっぱり曳山祭があるからやろな！」と「小さい時に曳山に乗ることによって自分が見られているということを意識するんやろな！そして自分ひとりで生きているのではないということ、居場所があるということをわかるんやろな！だから自然に店の看板に対する思いとか大事になるんやろな！」と話された。

長浜は、紹介した看板だけでなく本当に素材や見せ方にこだわるひさし看板や突出し看板があちこちに沢山あり、紹介するとキリがない。それ以外にも暖簾などの伝統的なものから金属板を使用して工夫を凝らしたものなど様々な形態が見て取れ、それだけを探索しても十分に楽しめる町である。長浜市も景観広告賞を平成24年度から毎年開催している。今日看板が景観をつくる重要な要素となってきていることは前にも触れたが、長浜においては豊公さんの時代から、近代化、戦争の時代を経て、今日の町衆の繋がりの中に極めて普通に活きづいている感覚な

元祖堅ボーロ本舗の看板正面

土田金物店のひさし看板（現：まちづくり役場）店先より

元祖堅ボーロ本舗店内より古いオーブンが棚になっている。

土田金物店のひさし看板（現：まちづくり役場）正面

元祖堅ボーロ本舗の看板アップ

丸芛屋のひさしの上にあるひょうたん型の看板。

景観広告（看板）が景観形成の要素となっている。

丸芛屋の突出し看板

のかもしれないと感じた。

二、水口の愛宕

２０１７年、甲賀市水口町のみなくち自治振興会から相談を受け、幾度となく水口に訪れた。相談の内容は東海道水口宿盛り上げ事業と題したプロジェクトが進められており、東海道沿いに位置し、江戸日本橋から数えて50番目の宿場町として地域住民が一枚岩となる事業に一緒に参加して欲しいとのことだった。

話は遡って２０１６年、大津市と草津市を貫く、一本の道「東海道」の統一案内看板デザインの作成に学生と一緒に取り組んだ。両市はびわ湖を挟んで対岸に位置し、数年前から互いに景観保全を意識し、次代の住環境のあり方を検討し合っている。両市の中心を通る東海道とその宿場町は住民の代表者と自治体が一体となって旅する人々をあたたかく迎えるための東海道統一看板の設置を進めている。現在もそのルールづくりや理念、広め方など慎重に議論が進んでいるところである。

同様に水口においても住民が主体となって「盛り上げ事業」が進められており、ここでも東海道という潜在能力を掘り起し、人々が行き交うことによって起こる唯一無二の展開に可能性をかけていると言える。今日も持続する春の水口神社の祭礼、水口曳山祭を筆頭に水口の歴史散歩ガイドブックの作成や街並みスケッチコンテストの開催、工夫を凝らした様々なマップなどが作成され、歴史、文化、民俗を住民や旅人に広く、絶えず知らせ続けておられる。

２０１７年の晩秋、学生と水口宿の町並みを歩いた。水口宿の特徴を理解しながら新たな気づきや見え方について自治振興会と学生が対話する機会が設けられた。「三筋の街」「山城と水城」「曳山祭」「かんぴょう」「竹細工」など定番の特徴に加え、特に気なったのが今回紹介する「火伏せの神」に対する住民の思いである。学生と一緒に町並みを歩き、要所要所で地域の方々から説明を聞く中、何度も耳にするのがこの火伏せの神「愛宕さん」である。特に三筋の旧町では数メートル行くごとに「愛宕さんの祠」が登場する。堅田や仰木、千野など私が住む近隣の古くから続く町並みに行くと必ず目にするが、水口のそれは数が多い。特に井戸付きの愛宕さんが数ヶ所あるのだが、日頃から湧水を探している私としては見過ごすことができない。高島市安曇川町中野の「秋葉の水」と呼ばれる湧水があるが、名前の通り火伏せの神とセットになっていることを思い出した。また以前から水城である水口碧水城のお堀から水が湧いていることは耳にしていた。「水口」という地名からも気になるところである。その日はそこに時間をかける訳にいかず一旦退散した。

ここで「愛宕さん」を少し整理しておく。京都市の北西にある愛宕山山頂に鎮座する愛宕神社が発祥とされる。古くは修験

道の道場であり江戸中期より火伏せの神、愛宕信仰として全国に広く信仰され今日では９００社、１０００社とも言われている。神仏習合より勝軍地蔵を本地仏とし、火之迦具土神（ひのかぐつちのかみ）を祀っている。台所でよく目にする「阿多古祀符 火廼要慎（あたごきふ　ひのようじん）」、祠に祀る「愛宕大神守護之所」などの札がある。各地に愛宕講と呼ばれる講があり、「千日詣」と称して8月1日に参拝すると千日参拝したのと同じご利益があるとされる。近畿地方では代参講が形成され札と榕の枝を受ける他、6・7月24日は「愛宕火」と称して火祭りをする所もある。また毎月24日は「愛宕精進」と呼ばれ火伏せの祈祷のため精進する地域が広くみられる。

後日、再び水口を訪れた。水口神社責任役員代表の秋田道雄（あきたみちお）さんにお話を聞くことができた。まずはその数であるが全部で51ヶ所に1カ所を足して52ヶ所あると説明された。毎年7月23日に愛宕祭が開かれ、水口神社の宮司が一つ一つ巡拝するそうだ。他の地域より1日早い愛宕祭である。氏子町内51ヶ所を1日で回るため、1カ所につき5、6分の程度の礼拝になるそうだ。その段取り、道順は水口神社を出発するとこの辺りでは古い地名となる美濃部の東見寺が1番である。朝の7時に到着し次に西へ2番は田中極楽寺へ、という感じで水口の旧町名66ヶ所の網羅が始まる。以前は66ヶ所あったそうである。残り14ヶ所は調べても今では、探したがわからないそうだ。ここに出てくる旧町名も面白い、江戸期の城下町設立当時の名残が知れる。「内殿」「城南」のように武家屋敷付近の町名、「蓮華寺」「大岡寺（だいこうじ）」は寺院の名称、信仰と縁が深いものは、「金刀比羅」「天理」などの地名がある。食料関係では「魚屋」「米屋」、手工業では「葛籠」「塗師屋」など、町人や職人に関係する町名が今も現役で使用されている。その地図では西から北へ回り、東へ水口の中心、東海道が三本に並行する三筋へと入るそして東の端である東見付を過ぎ、「田町」「月が上町」と51ヶ所を回るそうだ。その終了時刻は19時30分となっており、宮司さんのハードワークと町民の連携プレーは、今では夏の風物詩となっているようだ。では何故そんなに「愛宕さん」を祀っているのか。その理由は、江戸中期に大火が何度かおこったことによる。１６８６年には天王町、河内町が76軒、１６９１年には片町より出火して西問屋辻まで１６０軒、１７６０年には大池町から平町まで１００余軒が全焼したとの記録が残っている。「それが原因で当時の城主が指導したのではなかろうか？」と秋田さんは語る。現在も「愛宕権現」を祀り旧52町が「愛宕祭」を行い火難消滅の祈祷を行なっている。と手製のマップと水口の歴史散歩ガイドブックを片手にお話して下さった。江戸中期のこの辺りの様子を想像すると鈴鹿越えと草津宿の中間に位置し、2万石の藩の城下町であったことから比較的大きな宿場町であったことが想像できる。さらに井戸と愛宕さんの祠が一緒にあることも聞いてみると、「防火用水とは考えにくい！」と即答された。今では想像もつかないが、

火事となれば軒並み隣近所に火が移り、火消しが持っていた「とび口」で家屋を壊し延焼を防ぐのが精一杯であったようだ。その井戸は水源ではなく空井戸でとにかく大事なものを地面に隠し、急場をしのぐ井戸であったのでは?と推測された。実際にこの後、そのお手製のマップを片手に「愛宕さん」巡りを試みた。

改めて意識的にその祠を見て回るが本当に数が多い。辻を曲がった所、その向側、隣接して、宅地の隙間、といった感じであちこちにたっている。素材や仕様も様々である。木製、石製、コンクリート製など、祠の屋根の仕様も茅葺き、瓦葺き、銅葺き、現代の建材仕立てなど、また門扉付き、塀囲いがあるもの、常夜灯が併設されているもの、門灯付き、松などの植樹があるもの、ガレージの横、地蔵堂と隣り合わせのものなど、その町内によって様々である。どれをとってもきちんと整備が行き届き掃除がされているところを見ると地域の信仰があついことが伝わってくる。52ヶ所全てを網羅することは出来なかったが、最後に一つあげておきたい。7月23日とは別の日に拝される「愛宕さん」が一つある。番号ナシの52ヶ所目は7月下旬の土曜日に拝される。不思議なことにお稲荷さんの隣に位置し、祠の形をしておらず磐座が鎮座している。この石の中に護符が埋め込まれているとの事である。その町名を確認すると納得がいくがここでは伏せておく。

もう一つ、付け加えておくが、東見付（旧町の東の端）を超えたところから古城山への登り口裾野に秋葉神社がある。触れなかったが「秋葉さん」も火伏せの神である。ここの祭礼日は7月18日でありその由縁は江戸期明和初年ごろ大火が起こったため、火防の守護神として遠州秋葉神社（静岡県浜松市）の火乃火具土大神（ほのかぐづちのおおかみ）を祀ったのが始まりとのこと。「愛宕」と「秋葉」、火伏せの神のすみわけけが町の人達によってされている。

現代の我々の日常において火への恐れに実感は乏しい。きっかけは町の盛り上げ事業への参加であるが、東海道沿いの宿場町としての大きな懐を垣間見た。本陣、脇本陣を要した水口宿は多くの旅人を相手に文化を育んできた。新しい町のあり方を

塀囲いがされた愛宕さん

総石造りの愛宕さん

三筋の起点にある愛宕さん

地蔵堂と隣り合わせの愛宕さん

古城山の麓にある秋葉神社

正月飾りがされた愛宕さん、前に井戸

磐座の愛宕さん

井戸と愛宕さん

松と愛宕さん

隣り合わせの愛宕さん

住民が自立的に模索する中、火への恐れから地域を守ってきたコミュニティーの原点を見た気がする。

愛宕山の三十丁目に昭和19年まで営まれていた「水口屋（みなくちや）」という愛宕参拝客を相手にしたお茶屋跡がある。「水口」と「愛宕」は何かもっと関係があるのではないかと前のめりになるのは私だけではないかもしれない。

井戸と倉と愛宕さん

三、大溝のカフェ

2018年5月4日大溝祭を初めて見ることになった。この地に幾度となく足を踏み入れている。大津に住む私が北上して湖北や若狭への旅を進めるいわば玄関のような親しみ深い町である。曳山が五基出る古くから続く祭がある。近江は大津、長浜、日野、水口に代表されるように地域で曳山を出す祭礼が盛んな土地柄である。高島勝野地区はかつて大溝城を要した地であり、比良山系からの山々が一旦途切れ平地が広がる琵琶湖の西側の交通の要衝である。江戸幕府、この地に譜代大名をおき石高は小さいが重要な場所として位置付けていた。さて盛大、ど迫力とは言わないがコンパクトであるが確実に持続してきた曳山祭と90年代をこえてから町の人たちでじっくり実績を上げてきた大溝の町づくりに観点を置き、懐に潜りたい。

大溝祭の曳山が通る表通り北国街道（県道300号線）沿いに「高島びれっじ」がある。それは古い商家や蔵、民家跡の趣を残し、やりすぎないリノベーションを実践している。高島びれっじのウェブサイトを確認すると2018年でびれっじ構想から23年が経つそうだ。アクティブ95という地元旧高島町商工会有志が商家跡福井邸を改装し蘇らせたことが始まりだそうだ。翌年、商工会青年部により現在の2号館が改装され本格化したとある。現在では1から8号館まで増え、飲食店、カフェ、パン屋さん、スイーツ店、体験工房、アウトドアのお店、美容院と多種多様のお店が加わり、勝野商店街の賑わいを取り戻しているとある。中でも気になるのは県道から1号館横の路地を入り中庭が見え始めた頃に左手に見えるカフェ、その名も「高島ワニカフェ」である。本当に旧家の懐に入った所にあり、新緑の茂った中庭から見上げる青空が清々しい。銅板で丁寧に刻まれた看板はその生な素材と背景が絶妙のバランスであり景観を形成している。店前には薪が積まれており、自転車のスタンドが設置されている。そうした光景は今日琵琶湖周辺では珍しい光景ではなくなった。この街道沿いも私が訪れた祭の日、何台もの「びわ湖一周（通称ビワイチ）サイクリスト」を目にした。

オーナーの岡野将広さんにお話を聞くことができた。京都、奈良でフレンチ、和食、イタリアンと修行され、かねてから高島市での開店を望んでおられ5年前にこの地でやっと開店に漕ぎ着く事が出来たそうだ。「大溝藩の石高が小さいながらも交通の要所を任され、その暮らしと威厳が受け継がれていること、商家と武家の町であることから今日も地域の風習の中に名残があること。福井家本家の造り酒屋の並びに立つ分家、油屋に店を構えさせてもらっていることなど、準備期間が長かった分、歴史や地域性をじっくり学びました。」とここでしか出来ない自分の料理のためなら何でもやる！という気概でスタートされた。最初は縁もない土地で「道の駅」などで販売されている農家さんと直接交渉から食材探しが始まったそうだ。そのうち地域で取り組む無農薬栽培を志す農家さんとの交流が始まり「農家さんがつくる野菜の特徴にあった料理をするのが僕の仕事！」と、与えられた条件から多様多種の野菜ができる。それを出来栄えや好みで取捨選択するのではなく、全て使い、農家さんと一緒に地域を作り上げる。「工夫の連続で互いに刺激しあいながら一緒に成長することがこの地で料理をつくることじゃないか⁉」と熱く語られた。ワニカフェのネーミングは「生産者の輪と消費者の輪」二つの輪が重なっている意味が込められている。またそのロゴマークは実線で繋がった輪ではなく、よく見ると点の連続である事がわかる。それはその輪の広がりが無限に大きくなる希望が込められている。２０１７年の４周年を迎えた時、地元農家さんを招きパーティーを開いたそうだ。そこではそれぞれの工夫や技術、環境への対応など土と向き合う作り手同士のこだわりや情報交換がされたそうだ。５年目を迎えたカフェはその名の通り輪を着実に広げ、生産者と共感する消費者の輪が重なるコミュニティとなっている。店内にはその農家さん達が土と向き合う様子を収めた写真がパネル仕様で展示されている。厨房上の黒板にはその思いが柔らかく書き添えられていた。

ワニカフェは地元農家さんのこだわりおやさいやジビエ自然資料で育った鶏卵や近江牛など、そんな「命をいただいた実感のある季節ごとの食材」を直接いただいて使用しています。その時その時の旬の素朴な料理をつくりながら、関わる全ての人とあらゆる感動を共有したいと考えています。オーブンから2年目にセルフビルドで増築、3年経った頃には、近くで畑をお借りできました。この自然豊かな高島で四季の移り変わりをダイレクトに感じて暮らしていると少しずつ料理感は変化してきました。生産者との繋がりを強く感じながら「土地に溶け込み四季を感じ料理する喜び」にあふれ、こうして今ゆっくり5年目を歩んでいます。

Since ２０１３　６（取材時は２０１８年）

店内にはこの他、地域の生産者、クラフトマンが作った器やナイフフォークのセット、お店特製のジャムやスイーツが販売されている。実際にお店で使用される器と同じデザインのものが並んでおり食材から料理、クラフトまで全て地元の人々の丁寧なものづくりを感じる事ができる。さらにこの春から岡野さんは隣の蔵（以前はケーキ屋さんが入っていた）を借りてカレー店をスタートさせた。ここでも地元の米などの食材をふんだん

に使ったスパイスカレーを提供している。そこには湖の恵みも入っている。「変化の激しい時代であるからこそ、できることに挑戦したいです。」と意気込む。ワニカフェのランチはカレーを始めた為、新しい若手料理人が後を引き継いでいる。この日も私は彼が考案した近江牛のボロネーズソースパスタを食して店を後にした。

「大溝とその水辺景観」として２０１５年１月重要文化的景観に、同年、４月には日本遺産「琵琶湖とその水辺景観-祈りと暮らしの水遺産」に選定を受けた。暮らしと背景をリスペクトする精神が受け継がれていると感じた。

北国街道（西近江路）沿いに佇む高島びれっじ

左手前の蔵がこの春からのカレー店、奥の納屋がワニカフェ

瓶詰めのスパイス類と農業、地域、食の本が並ぶ

カフェ店内には地元農家さんの写真が展示されている

入り口横には薪が積まれている

クラフトマンの仕事、作品も販売されている

厨房上の黒板に書かれた思い

青空が開ける中庭

近江牛のボロネーズソースパスタ

銅板製の看板

四、草津の関札（せきふだ）

草津は言うまでもないが東海道、中山道が交わる交通の要衝であり、今日もその道筋をなぞる様に日本の主要な交通インフラが行き交う結節点である。であるからこそ絶えず変化し続ける街と言って良いだろう。「近江の懐」はどちらかと言えば日が当たりにくく隠れたところに輝く「暮らしの気づき」みたいなものというイメージで取り組んでいる。ここ数年、私は様々な仕事で草津に足を運んでいる。町づくりの会議、景観ワークショップ、など何度も足を運んでいる場であることから、街に関わる当事者に近い感覚であり「懐探し」に繋がらなかったの

納屋？を改造した店内

この春からのカレー（写真協力：カリー食堂 キッカ）

が正直なところだ。２０１８年より私が勤務する成安造形大学に地域実践領域がスタートした。今日の社会状況や地域の魅力に焦点を当て、創造性を活かして新たな仕事や暮らし方を探求するコースである。そこで授業を担当において「街道と宿場町」を代表する草津がターゲットとなった。秋晴れの爽やかな空気を感じつつ、学生と一緒にこの街の魅力探索「懐探し」を始めることになった。

草津と言えば「本陣」である。東海道と中山道が交わったすぐのところに草津宿本陣（田中七左衛門本陣）が現存している。史跡名勝として１９４９年７月に国指定を受けており、江戸期の草津宿場町の様相を想像させる中心的シンボルである。草津宿本陣のホームページによると、『「本陣」とは本来、戦の際に軍の総大将のいる本営のことを指していましたが、休泊施設の起源は、室町時代、二代将軍足利義詮が上洛に際して、その旅宿を本陣と称し宿札を掲げたことに求められます。そして江戸時代には街道を往来する大名や公家等、貴人の休泊施設を指すようになりました。』とある。その表門、向かって左側にいつも木製の表札が目線から高い位置に立っている。２０１８年10月末に訪れた時には毛筆で「近衛殿御休」と書かれていた。さらに中に入り玄関口にも「松平出羽守宿」「出雲少将宿」などと書かれた木製の表札が10枚ほど並んでいる。どれも樅（もみ）の木製板に書かれており、中には右側に小さめの文字で日付が記されているものもある。今日でいう旅館でお迎えしてくれる「歓迎〇〇御一行様」の様なものであろうか。史跡草津宿本陣、草津宿街道交流館の八杉淳館長にお話を聞くことができた。

この札の名前は関札（せきふだ）と呼ばれ、本陣が用意するものではなく、休泊する側が予め用意するものだそうだ。ではそもそも休泊の手順であるが1年から50日前に予約を入れ、部屋割りをするところから始まる。休泊する7日から10日程前に例えば藩の宿割役人と関札打ちが本陣へ先乗りし下準備など様々な調整確認する。その際に関札が渡されるそうだ。この関札を参勤交代の行列が到着する一両日前に太い青竹の先に掲げる。表門前と二十万石以上の大名、宮家、幕府の重職の時には宿駅の玄関口（草津宿では京都側は新草津川、江戸側は横町道標辺り）両側に立てる。五万石の中位の大名であれば入ってくる側のみ「片札（かたふだ）」と表門前に、旗本は木の札の代わりに奉書の紙札を表門に貼り出すというように石高によって違いがあったそうだ。面白いのは当日、本陣の当主は迎える休泊者の家紋のついた紋付袴姿で宿場の入口まで出迎えに行くとのこと、その証拠に薩摩藩島津氏の「丸に十文字紋」のついた紋付袴が展示されている。次に書かれている内容を見てみたい。例えば上から松平（氏名）出羽守（補識名）宿（休泊形態）である。これを見ると御一行様との文字がないことから休泊者が自前で持ち込んだことがよくわかる。さらには板の大きさの違いや文字の書き方などからその家格が想像できる。文字の末尾には泊、宿、休とあるが、泊は宿泊で本陣側が食事の準備をす

る。宿は同じく宿泊であるが自炊をする。休は昼休みとある。そしてこの関札は一回限りの休泊の使用である。

そこで私は少しその流れなど想像を膨らませ、八杉館長に色々質問してみた。正直なところ本陣休泊の利用において何とも面倒な仕事であろうか！「泊」であろうが「休」であろうが予約から当日までの段取り手間は同じである。それを藩の宿割役人と関札打ち、本陣側の担当者が事前打ち合わせをしながら調整しているのである。大雨などで天候不順で遅れることもあったであろう。また大名が宿駅内で同時に休泊することはなかったそうだ。これに関しても双方の藩の担当者（宿割役人）が事前調整を行い、互いの家格威厳を損なわないようにするためコミュニケーション能力が高い人が役を任されていたように思う。また現在のように携帯電話は当然ないことから、街道沿いで暮らしを営む様々な人々によって情報伝達がされたことが想像できる。大名側は参勤交代の最中その緊張感はお国から江戸まで絶えず続いているということである。逆のことが本陣側にも言える。石高の高い大名が訪れるとその家の紋付袴姿になりその都度、宿駅の入り口まで出迎えに行く。玄関には家の定紋を黒く染めた幕を張り一対の盛砂をして跪いて迎えるのである。草津宿においては中山道と東海道の合流点であることから当然休泊者も多く、こちらも絶えず緊張状態にあったはずだと想像する。調整の失敗はこの時代許されない。平静が保たれた江戸期とはいえ大名側であろうが宿駅側であろうが沙汰は降ったはずである。生業として仕事として任務遂行は当然のことであろうが仮に自身がその役を命じられることを思うと身の毛が立つ思いだ。しかし、これら宿駅制度によって気遣いや作法、礼儀、様式、そして日本独特の美意識や文化が育まれたと言っても良いであろう。そしてそれに関わる様々な雇用を創出したとも言えるであろう。江戸中期を過ぎると財政難や外圧からの恐れは免れなくなってくる。徳川慶喜の時代に参勤交代の制度を緩めざるを得なくなり、江戸幕府崩壊はそこから始まったのではないかと八杉館長は話された。

この関札、木札は４６５枚、紙札は２９５１枚、合計３４１６枚、現存し、草津宿本陣にて大切に展示と保管がされている。関札が現存している理由は本陣が現存しているからに他ならない。栗太郡役所や草津市の公民館として長らく建物が活用され、また田中家が代々受け継ぎ暮らしてこられた。場でもある。もう一つこれは私の推測であるが、田中七左衛門本陣は材木商も生業とし、木屋本陣と呼ばれていたことから木材の扱いや保管に優れており関札の製作も請け負っていたのではないだろうか？平成元年から7年には草津市が絵図をもとに保存整備工事を行い、元ある形へと復活させている。

近江の人々は時の政（まつりごと）やその体制、自然条件、に対してとても敏感に反応し、次の時代を予測する能力とバランス感覚、コミュニケーション能力に長けていたのではないかと想像する。草津市の中心市街地は、旧草津川が新たな公園へ

公家の関札は敬称がついている

草津宿街道交流館図書コーナーにて

紙製の関札（木の板に貼って表示）

草津宿本陣玄関口にずらりと並ぶ木製の関札

草津宿本陣表門前にて

薩摩藩支藩の佐土原藩主から拝領したものと考えられる裃(かみしも)

近衛殿御休と書かれた関札が掲げられている

草津宿本陣表門前にて

と整備され、街道沿いは宿場町を意識した建築物が建てられている。変化の激しい時代に対応しながらも、今日も草津宿本陣表門前に関札が掲げられ観光客を迎えている。それはこの街の歴史の厚みや度量を伝えている様に思う。

追記

２０１６年12月より滋賀県文化振興事業団（２０１７年４月よりびわ湖芸術文化財団）が発行する「湖国と文化」に〝近江の懐〟と題して近江の宿場町におけるものづくりやそこで育まれた精神性、次世代につなげる新たなる価値を写真と文で紹介する機会をあたえられた。現在まで八回の連載が継続されており、２０１７年10月より２０１９年１月までの第５回から第８回までのオリジナル文を可能な限り残し、近江学研究紀要として再編集した。紀要の冒頭は２０１８年４月よりスタートした地域実践領域クリエイティブ・スタディーズコースの授業にこの「近江の懐をめぐる」を組み込み、学生たちと街の魅力発見に取り入れることの試み、紹介から始めた。本文では一緒に取り組んだことで刺激を受けたことにより、見つけ出す新たな感覚や思い、考え方をまとめていく様に心がけた。彼らとフィールドを歩きながら気付かされたこととして、純粋さがゆえに色眼鏡でものを見ないことである。知識が少ないことから予測を元に行動ができない。そのことが対象への新鮮なアプローチとして目に映った。水口のフィールドワークでこんなことがあった。街が見渡せる丘の上に忠魂碑を見つけたあるグループがその存在が一体何かを調べることになる。そこで彼らがそんなに遠くない過去にこの国が戦争していたことを再認識する。碑の近くに刻まれていたプレートに「支那事変、大東亜戦争　水口町戦没者の妻一同」の文字を発見する。よく知られた名称とは別の表記であることに気付き、歴史の教科書で知る知識と違う実感が得られたのである。学生たちはその研究課題のタイトルを「きになるとこへ～水口の人の思い～」としていた。一見、街の魅力というと「ものづくり」「ことづくり」に着目しがちであるが、彼らはこの街の人の思い「こころ」に焦点を当てたと言えるだろう。結果として「モノ」や「コト」に還元されアウトプットとして見えているが、そこに人の「こころ」無くして何も生まれないだろうし、後世に語り継がれることもないのであろう。そのことを学生と「近江の懐探し」を試みながら改めて気付かされた。

成安造形大学附属近江学研究所紀要　第８号

発行日　平成31年３月●日

発　行　学校法人京都成安学園　成安造形大学　附属近江学研究所
〒520-0248　滋賀県大津市仰木の里東４-３-１
電話　077-574-2118

発行者　西久松吉雄

編　集　成安造形大学附属近江学研究所

印刷所　宮川印刷株式会社

©Seian University of Art and Design 2019

ISSN 2186-6937